

1960~2010 半世紀を超えて

## さんごかい 35会 (昭和35年卒) 五〇周年記念クラス会

皇太子妃ミッチーブームで日本中が沸き立った翌年、安保反対で全国の学生運動に火がつき安保闘争に熱中した昭和35年3月15日卒業。その卒業日に合わせて平成22年3月15日、35会の50周年記念クラス会が雄琴温泉びわこ緑水亭で開催された。

今回は幹事も3人があたり、早くから開催日も予告、準備してくれた。

JR京都駅で主幹事の松尾、経理担当の法貴両君の乗用車の配車を受け、まず母校西棟正門前に11時集合。幼稚園、小学校から大学まで一度も交通機関を使わず徒歩で通学できた母校近くの松ヶ崎住民の安部田君の出迎えを受け、校内を案内してもらう。

### \*母校訪問\*

門を入った右手に、まだ乗用車が殆どない時代に当時の学部長専用車の石造りの車庫がそのまま残っていて、それをうまく活用して談話室になっていた。当時の田中隆吉学部長、増尾学部長（後学長）を思い出す。おりしも美術工芸資料館で開催中の本学所蔵の浅井忠（教授）作品展を鑑賞。創立期中澤学長、浅井忠との関係。浅井忠と祇園の芸子らの交流など、明治の大らかな時代が伺える。唯一現存しているレンガ造りの図書館も資料館として残り往時が偲ばれる。図書館といえば、館長であった福永君（物故）の父君、意匠科の福永教授に卒業アルバムの図案を描いてもらった事が記憶に甦る。学園祭の名物行事であった「ろうけつ染」をやった化学実験棟のあたりはすっかり変わり、吉武教授、小西教授の研究棟の面影もない。道路をはさみ東側棟へ進み、曾て記念植樹した桜を当時の世話役で現在も京都植物園でボランティアをしている鈴江君の案内で見回ったが、成育して正確な位置がわからず、ほぼこの辺と見当をつける。

最後に学外北側道路沿いの民家の中に建築中の同窓会館を見学して、白川から山紫煙る比叡を仰ぎつつ、山中越えで坂本に向かう。

山紫水明の京都といわれるが、それは冬に山肌が紫となるこの時だと教えられた梵鐘博士の青木教授（学生部長）の言葉が懐かしい。日吉神社の全国総本家の日吉大社の門前町としてまた延暦寺の高僧の自坊、宿坊街として栄えた坂本。「味は一番、電話は二番」と明治大正時代から宣伝された老舗本家鶴喜蕎麦で昼食。電話は今でも077-578-0002、建物は木造旅宿館風で有形文化財、味は関西風で江戸風のコシがあまりないので評価は分かれる。

### \*穴太（あのう）積み\*

腹減らしに周辺を散策。日吉大社の参道沿に南（左）側は穴太積みで組まれた延暦寺の宿坊の石垣。自然石と小石をうまく配置して積み上げた見事な佇まいである。

穴太積みとは坂本穴太の石工集団が築いたものを称し、安土城、大阪城などの石垣造りでつとに有名。京阪石坂線の

近江神宮から坂本駅方面に進む中程あたり山手が天津穴太の里で、段々畑も石積みされているのが見られる。あたりが延暦寺のお抱え石工集団として発展し、今尚その伝統技術を伝える一族がいる。

参道左を150mほど進み、京の町屋で愛された水琴窟のある屋敷の庭で風流な水音を聴く。日



吉大社まで進み、戻りは神社の建物の多い道。途中、保存樹に指定された珍しいタラヨウ（モチノキ科）を見過ごすところだったが、植物園で培った鈴江君の指摘で20mほどの大木を仰ぐ。（タラヨウの葉に竹筆などで文字を書くと、ハッキリと黒くなるので紙の貴重であった古代奈良などでは、代用紙として使われていた。「ハガキの木」として郵便局のシンボルツリーになっている）

4時前に本日の主会場の雄琴温泉びわこ緑水亭に到着。かつて名を馳せた雄琴もすっかり面目一新。湖岸に建ち、対岸中ほどに依藤太のムカデ退治で有名な三上山（近江富士）が眺望できるホテル。あいにくの春霞で湖面はぼんやりしている。（巷のこのホテルの評価は5段階で4.5とすこぶる高い）

## \*宴 会\*

まず到着順に一風呂浴びる。今日の幹事の一人で平城遷都1300年の案内にNPO法人で忙しく活躍している坂東君が急用で欠席との事、残念。同じように定年後も活躍しているこの近辺在住の衛藤、林君らが到着。NPO法人で環境問題をとりあげ熱心に活動している飯井、山田君、悠々自適の松本（繁）、中村君、京都でコーラス活動に熱中している黒田君らの元気な顔もみえる。京都検定をとり、仏像、美術、歴史に強い松岡君も到着。現役で活躍中で今日も勤務中だった松木君が最後に6時頃到着。

本日の出席者は地元大津出身の私（園田）をいれて14名。50年を過ぎて物故者（瀬川、刈谷、桑島、竹林、竹内、福永、藤原、森本）も8人を数える。ご冥福を祈りたい。

海外、関東在住ら7～8名の顔を長い間見られないのは寂しい。

松尾幹事の挨拶と色染会存続についての熱い思いが語られる。最近ミニクラス会を含めて年に2回ほどお互いに顔を合せているので手順も慣れたもので、食事を楽しみビール、水割り、チューハイをちびりちびり、ひところの酒豪はいない。音痴揃いでカラオケを歌わないのもこの会の特色である。

明日の予定のある人達が最終列車で帰り、宿泊者が籤引で全室湖岸側の部屋を2人1部屋で済める。それでも宴が終わっても引き上げず談笑。明日は対岸にある佐川美術館を見学する予定であったが、おり悪く休館のため変更して信楽山中のMIHO美術館を見学することになる。

16日早朝、琵琶湖に面した各部屋特製の室内がガラス張りの檜風呂に入浴。



ゆっくり朝食をして地元で詳しい林君の案内で2台の車に分乗、琵琶湖大橋を渡り守山、草津と旧中仙道沿いに南下、草津より旧東海道沿いに石部、信楽の奥深い山中を回り、約2時間かけて突然開けた美術館に到着。設備は良く整い受付から本館まではカートで運行、しだれ桜の並木が綺麗で4月の開花が見事だろうと想像する。建築設計は、パリ・ルーブル美術館のガラスのピラミッドなどで有名な、I. M. ペイ氏による、山中の桃源郷をイメージして作られた美術館。ギリシャ、ローマ、エジプト、中近東、ガンダーラ、中国、日本の作品など2000点以上を所有しているそうである。

以上を所有しているそうである。

## \*幻の耀変天目茶碗\*

松岡君のお薦めは《耀変天目茶碗》。南宋時代のもので前田家伝来で、大仏次郎所蔵とされ、重要文化財となっている。この茶碗は中国福建省の建窯で焼かれ、愛好家には垂涎の器。世に耀変天目茶碗は幻といわれ、その争奪で松永弾正の戦いの元となったとか。原産国の中国にもないとか。現存する物が3点あり、いずれも国宝に指定されている。

他に鎌倉時代の木造持国天像、地蔵菩薩立像などが目の当たりで見られる。ローマのフレスコ画、古代イラン出土のるつぼなどや中国の石棺彫刻などが印象に残った。

下山して狸の焼き物で有名な信楽の町で昼食すべく適当な店をさがしたが見当たらず、やっと焼き物会館の前あたりで見つけて昼飯。昨日、折角の全員集合の記念写真を取るのを忘れていたが、いまさら後の祭り。食後に残ったメンバー9名のみの撮影。帰路再び乗用車で高速道を走り、午後3時過ぎ次回を約して京都駅前解散する。



今回参加者は 園田英夫 松尾秀明 黒田 亘哉 林 敏郎 安部田 貞治 松本 繁男  
衛藤 嘉孝 法貴 英夫 松岡 謙一郎  
飯井 基彦 鈴江 登 中村 準市 松木 雄一郎 山田 英二  
の、14名であった。 (下段5名は宴会のみ参加)

(本文は地元大津生まれの園田にお鉢が回り、一年余り前の記憶を頼りに記述した、誤りをご容赦下さい)

(色染・昭35年 園田英雄)